

環境悪化・終末時計は残り 100 秒

岩本友則

2020年1月23日、米科学雑誌「ブレティン・オブ・ジ・アトミック・サイエンティスト」が人類滅亡までの残り時間を象徴的に示す「終末時計」が「100秒前」となった事を発表しました。

また、近年温暖化による気候変動の深刻な被害が世界では生じていますが、2014年に公開された映画「インターステラー」では、異常気象によって人類滅亡の危機が訪れ、人類が移住するための惑星を探すことが描かれています。

グローバル化・会話の取り掛かり役立つ聖書の記述

国際社会において、仕事や生活していくための第一歩は、良い人間関係の構築、特に、日本人が全くいない多国籍人種の中で働くには不可欠です。互いの人間性を理解し、信頼関係を築くには会話からです。ここで役立つのが、聖書の知識です。その理由は、2つあります。

第1に、旧約聖書は、キリスト教、イスラム教、そしてユダヤ教で用いられている經典であり世界の多くの人が知っています。

前述した終末時計は、聖書の黙示録16章16節に記述された地球滅亡に至る世界最終戦争ハルマゲドン（場所は、イスラエルのメギドの丘）、多分、核兵器を用いた核戦争を踏まえて時が刻まれたものだと思います。また、映画インターステラーの移住計画のプロジェクト名「ラザロ計画」も新約聖書ヨハネの福音書11章に出てくるイエス・キリストが死から蘇らせたラザロに因んだものでしょう。

このように、映画等で聖書の多くの記述が引用され、世界の多くの人が知っていることから、聖書の記述は、話題として使えます。

第2に、道徳性の観点です、日本人は道徳性の高い国民ですが、海外での道徳性の計りは、宗教的マインドです。無宗教の人は道徳性に欠け信頼性がないと見られます。中東のある国の入国申請書には、宗教が何か記入する欄があり、「無」とした人は、道徳性がないと判断され入国できません。

過去にもあった人類滅亡の危機

旧約聖書、創世記6章～8章にかけて大洪水により世界が滅びる様が記述されています。この時、箱舟によって、ノアとノアの家族、全ての生き物の命が繋がれた事が記述されています。

私の聖書的センスからすれば、映画インターステラーの宇宙への移住先を探すプロジェクト名は「ラザロ計画」ではなく「ノアの箱舟計画」にします。

ノア箱舟について説明しましょう。人類に悪が増大していく姿に創造主である神は、40日40夜大雨を降せ、全地を覆う大洪水によりリセットされます。神の前に正しい人であったノアは、神の命令に従って大洪水に備え、大きな箱舟を作ります。箱舟の大きさは「長さ133.5m、幅22.2m、高さ13.3m」で、ちなみに、現在のタンカーなどの大型船舶を建造する際に使われる最も安定している比率「長：幅：高=30：5：3」です。

この箱舟に、ノアの家族と、各種類の動物、鳥及び地を這うものすべての「つがい」が生き残るために小舟に乗せるのです。そして40日40夜大雨が続き、水は150日間増え続け「第7の月の17日

箱舟はアララト山の上に止まった。英語では「Then the ark rested in the seventh month, the seventeenth day of the month, on the mountains of Ararat.」とあります。

古代の大洪水にまつわる伝説や神話（大洪水神話）は、世界中に存在し、その発生を主張する学者や研究者も多いのです。聖書以外に大洪水が記述されているものとして、メソポタミア神話の「ギルガメシュ叙事詩」があります。

一方、世界規模で起こったとする者は少なく、「メソポタミア近辺での、周期的な自然災害」ではないかとの見解も多いのです。

アララト山

ノアの箱舟が漂着したアララト山は、トルコにありイランとの国境に接している所です。イラン政府のオフィスビルの窓から外を見ると雪を頂いている山があるではありませんか、ここはイラン、そう思うとテヘランからは、地理的（右記の地図参照）に見ることは不可能ですが、私にはアララト山に何故か思えたのです。私の思いを説明し写真撮影の了承を得て撮影しました。

（下記の写真）



横に5枚以上ないと収まらない施設です。

アララト山について2010年4月27日山頂付近（標高およそ4000メートル地点）で、ノアの箱舟（Noah's Ark）の木片を発見し、炭素年代測定の結果、箱舟がさまよったとされる今から約5000年前と同時期のものであることが確認されたとのこと。



近未来においてラザロ計画あるいは箱舟計画が必要となるかもしれません。

ここはイラン、写真を撮るならイスラム原理主義の総本山ホメイニセンターとの勧めを受け撮りました

（右の写真）。あまりの大きさに1枚の写真に納まりません。多分



また、発見された構造物は、いくつかの部屋らしきものに分かれていたことから、普通の住居の残がいなどではあり得ない。それは、標高3500メートル以上で人の住まいが発見されたことは、過去には無いからです。

左の写真が、イラン側から見たアララト山、日本の富士山のように見えますが、イランから提供を受けたものですから、アララト山です。

地球環境の悪化、世界最終戦争を踏まえると、

続く